



メキシコ歴史文化講演会 2018：第4回報告

「日墨文化交流のパイオニア：北川民次と佐野 碩」

ノンフィクション作家
アミーゴ会員 山本厚子

メキシコと日本の「文化協定」が1955年に発効したが、それ以前に両国の文化交流に多大な寄与をした「パイオニア」としての二人—北川民次と佐野 碩—の存在意義は大きい。両国の未来関係を考える今、二人の巨人を思い出してみたい。

北川民次：メキシコと日本の子供たちの絵画教育に情熱

1910年のメキシコ革命の影響を受け、1920年代にはリベラ、シケイロス、オロスコらを中心に「壁画運動」というメキシコ独自の歴史、文化を一般大衆に啓蒙する運動が始まった。その「壁画運動」に参加した日本人画家が北川民次である。

北川民次（きたがわ たみじ；1894～1989：メキシコ滞在は1923～36年、55年）は静岡県島田市生まれで、早稲田専門学校を1914年に中退し、20歳で画家を目指して日本茶の輸入販売業を営む実兄を頼って米国オレゴン州ポートアイランドに渡り、語学学校で英語習得に励んだ。1916年にシカゴを経てニューヨークに渡り、舞台美術の書き割り職人として働いた。1919年にはニューヨークのアート・スチューデント・リーグに入学して美術を学び、研鑽を積んで1921年に卒業した。この1875年設立の美術学校では在米画家となる国吉康雄（1889～1953）も同時期に学び、国吉は1933年から亡くなる直前まで20年間教鞭をとった。

カルフォルニア州での反日気運の高まりをうけて、北川は1921年に米国を出てキューバに入った。ハバナでは有り金を盗まれたという。その後1923年9月、メキシコにオリサバ経由で入国した。

北川は1923年にメキシコ市のサン・カルロス美術学校（国立美術学校）に入学し、わずか3カ月で所定の課程を修了して卒業した。同校ではオロスコ、リベラ、シケイロスなど名だたる画家が学んだ。1924年にはメキシコ市郊外のチュルブスコ僧院附属野外美術学校の、1925年にはトラルパン野外美術学校の教員となり児童に絵画を指導した。野外美術学校の生徒の作品はメキシコ大統領や文部大臣の高い評価を受け、ヨーロッパ巡回展ではパブロ・ピカソ、アンリ・マティス、藤田嗣治などが称賛したという。

北川はこの時期にリベラやシケイロスと親交を結び、彼らが中心となって推進していた「壁画運動」に共感し参加した。1931年に北川はタスコに移転した野外美術学校（児童絵画学校）の校長となった。この間1929年には愛知県瀬戸市出身の二宮てつ乃と結婚し、翌年に長女が生まれた。また、1933年には南北アメリカを旅行中の藤田嗣治夫妻がタスコの民次の家に一週間逗留し、この他に国吉康雄、イサム・ノグチ、シケイロス、リベラなどの訪問も受けた。



↑リベラと(1955年再訪時)
←シケイロスと(同上)

北川は1936年の夏、タスコ野外美術学校を閉鎖し、妻子と日本に帰国した。帰国の理由は米国財団の芸術助成金の獲得や長女を日本で教育するためという。

日本に帰国した北川は藤田嗣治と一緒に、「メキシコ児童の絵画展」の開催に奔走した。1938年2月には横浜市教育会館での講演と併行して、メキシコから持ち帰った児童画の展覧会を開催した。ここに日本で初めてメキシコの児童絵画が公開された。

＝ 目 次 ＝

1. 第4回講演会報告：「日墨文化交流のパイオニア：北川民次と佐野 碩」 ノンフィクション作家 山本厚子...1
2. 私とメキシコ：「食の世界遺産 メキシコ料理へのアプローチ 5」 La Casita オーナーシェフ 渡辺庸生...3
3. お知らせ：「アミーゴ会 20周年記念昼食会 9月21日」／「御宿コンサート7月6日」／あとがき ...5
4. 私の本棚：川田玲子著『メキシコにおける聖フェリーペ・デ・ヘスス崇拜の変遷史 神の沈黙を超えて』 ...5

1937年、北川は第24回二科展に「タスコの祭日」などを出品し、藤田嗣治の推薦で二科会会員となった。戦後、北川は東郷青児と二科会の隆盛をもたらし、1978年4月には会長の東郷の死で副会長の民次が会長に就任した。しかし運営方針の対立で9月に会長を辞し、翌年には二科会も脱退した。他方1949年と1950年の夏には名古屋動物園美術学校を東山動物園内に開校し小学生の絵画教育を始めた。1951年には名古屋市内に北川児童美術研究所を設立して児童の絵画教育に情熱を傾け、児童画教育者として国際的な評価を受けた。



CBC会館の壁画「平和と芸術」1959年

1982年出版の絵本『うさぎのみみはなぜながい』の語り口と絵は、メキシコの昔話を題材にメキシコらしい「くそ真面目なのにユーモア」に溢れている。メキシコ政府は1986年、外国人への最高位勲章「アギラ・アステカ勲章」を授与した。メキシコの「暖かい心」を象徴する叙勲だ。1989年4月、96歳で永眠。

佐野 碩：メキシコ演劇の父ー「芸術は民衆のものだ」

佐野碩（さの せき；1905～1966：メキシコ滞在は1939～66年）は、後藤新平の孫（母が後藤の養女）として精神科医を父に生まれた。後藤の長女の子である鶴見和子・鶴見俊輔の姉弟とは従兄弟で、また日本共産党指導者の佐野学は叔父、同じく佐野博は従兄弟に当たる。作家の今日出海とは中高と寮で同室だった。

佐野は高校生の頃から演劇に夢中になり「プロレタリア演劇」運動に参加した。東京帝大在学中の1926年に新人会に参加して千田是也らとマルクス主義芸術研究会を創設、1926年に「無産者の夕」で初演出した。1927年のプロレタリア劇場創立、1928年の左翼劇場創立に尽力した。以後、プロレタリア演劇同盟の書記長を務め、左翼劇場の「暴力団記」の演出などプロレタリア演劇を代表する演出家として活躍した。

1930年に治安維持法違反で逮捕されるが、偽装転向して1931年、26歳の時に日本を脱出して渡米した。ドイツなど欧州各国を経て1933年にモスクワに渡り、世界的演出家で現代演劇の革新者であるメイエルホリドに国立劇場演出助手として師事し、強い影響を受けた。またスタニスラフスキーに舞台演劇を学んだ。

しかしスターリンの外国人粛清に遭って1937年に国外追放となり、フランス・チェコ・米国と渡って1939年、34歳のとき、カルデナス大統領の承諾を得てメキシコに政治亡命した。このとき日本政府は佐野の本国送還を求めてベラクルス上陸を妨害したが、メキシコの文化人団体の援助で入国を果たした。すでにメキシコの「1917年憲法」は政治亡命を認めており、カルデナス大統領の方針で、トロツキーやスペイン内戦に敗れた共和国派関係者などの多くの政治亡命者を受け入れていた。

佐野はメキシコ政府の民衆文化向上政策を背景に、電気労組の支援を得て上陸3カ月後には民衆活動としてのダンスと芝居と人形劇の融合した演劇活動を開始した。そしてスタニスラフスキーとメイエルホリドの方法を統合した新しい演出技法の実践に乗り出し、メキシコ電機労組のテアトロ・デ・ラス・アルテス（芸術劇場）設立に関与し、メキシコ市のベージャス・アルテス（国立芸術院）内に芸術劇場附属演劇学校を個人で設立するなど活動を展開した。しかし理想を求めあまり芸術劇場建設資金の流用問題を引き起こし、支援者の電気労組は1941年に絶縁を組織決定した。第二次大戦中は公演中止が相次ぐ苦難の時期となった。戦後もメキシコで「欲望という名の電車」、「るつぼ」、「リア王」など精力的な演出を行い、新しい演劇運動を組織した。1963年には念願の演出教育拠点テアトロ・コヨアカン（コヨアカン劇場）が完成した。

佐野はメキシコ滞在27年間に数千人の演劇生を育てあげ、30作品の演出をし、テアトロ・デ・ラス・アルテス演劇学校、ドラマティカ・デ・メヒコ演劇学校（附属演劇学校改称）、テアトロ・デ・ラ・レフォルマ演劇学校（テアトロ・デ・ラス・アルテス改称）、ボゴタ舞台芸術学院などでの活動に参加した。1955年にはコロンビア政府招請でボゴタに3ヶ月滞在し演劇指導にあたったが、政治介入を理由に国外退去となった。

佐野は舞台の芸術性・社会性を説いて「芸術は民衆のものだ」と主張し、高い理想の実現に邁進した人生を送った。メキシコ演劇に情熱を注ぎ、いまでも「メキシコ演劇の父」と呼ばれて尊敬を集めている。1966年9月メキシコで病没。享年61歳。遺骨はメキシコと日本に分骨された。

参考：時代背景

1897年エノモト移民チアパスに入殖。1894年日清戦争。1904年日露戦争。
1910年メキシコ革命。
1914～19年第一次世界大戦。1914年パナマ運河開通。1917年ロシア革命。
1935～45年第二次世界大戦。1941～45年太平洋戦争。
1954年10月25日「日墨文化協定」締結・翌年10月5日発効



企画展「佐野碩と世界演劇」(演劇博物館 2013年)

【編集部注①】：山本厚子さんにはアミーゴ会第4回講演会(2018年12月4日)の講師をお願いし、その熱情溢れるお話しに参加者は聴き入るばかりでした。編集部は山本さんに敷衍不足の事柄などを投稿くださるよう依頼していましたが、体調が優れないとのことで、山本さんのご指示により「講演レジュメ」に基づき、あるいは講演メモや資料などを参照して本報告記事としました。

【編集部注②】：北川民次没後30年特別展：瀬戸市美術館「市民が愛した北川民次」が7月28日まで、半田市かみや美術館「墨彩画」展が8月25日まで、真岡市久保記念館まちかど美術館「絵本原画」展が9月2日まで開催中。名古屋市立美術館などが作品を館蔵。

【編集部注③】：佐野碩の事績を知る参考書：菅孝行編『佐野碩 人と仕事 1905-1966』（藤原書店 2015年）および岡村春彦著『自由人 佐野碩の生涯』（岩波書店 2009年）がある。なお、2013年に早稲田大学演劇博物館で企画展「佐野碩と世界演劇」が開催された。

メキシコ料理へのアプローチ

メキシコ料理店 La Casita
オーナーシェフ 渡辺庸生

日本におけるメキシコ料理のパイオニア La Casita(ラ・カシータ)のオーナーシェフ渡辺庸生さんに、ユネスコ食の世界遺産に指定された多様なメキシコ料理文化の真髄を縦横無尽に語っていただきます。どのようなお話しが飛び出すか毎号のお楽しみです。La Casita の HP:<http://www.lacasita.co.jp/menu/sugerencia/index.html> (編集部)

第16章 TV界の常連さんとのつながり

代官山、旧山手通りにOPENした1978年、春、高木君がひょっこりと顔を見せた。渋谷、公園通りにラ・カシータを創設出来る出会いを演出してくれた男だ。「高木プロ」を設立して女優を育てているという報告だった。白都真理、星野知子、和由布子、後にドラマ、舞台、映画で名を知られてゆく顔ぶれが揃っていた。ある大物作詞家の元で教えを受けながら、局の現場に出入りし人脈を築いて来た経験は、発掘した有能な表現者を開化させるには充分すぎる条件が整っていた。

「渡辺さん、お願いがあります」とおもむろに切り出した彼の要望は、所属の彼女達が取材を受ける場所に店を利用したいという話だった。雑誌の撮影やインタビューの席、迷惑じゃないでしょうか？と遠慮勝ちに申し出る態度に好感が持てた。片隅に店名を表記してもらおう約束で快諾した。マネージメントの辣腕ぶりは群を抜いていて、毎月何社も女性誌や月刊誌にテラスの情景や、店内の雰囲気掲載される状況となった。そして、今度はTV放送の協力に繋がってゆく。

真理さんや知子さんが当時、高視聴率を挙げていた高島忠男夫妻の料理教室に出演する際、簡単に美味しく出来るメキシコ料理を披露したいのでレッスンして貰えればとの申し入れはこちらの方が嬉しかった。決して器用ではない二人でも手軽に習得できる卵の一品や海老の一品はスタジオでも好評を得、一瞬ではあるが全国にその味覚が波及した。

メディアを駆使して事務所の女優達を知らしめる彼

第17章 来店した心臓外科名医は同郷だった

それは2010年、夏の頃である。いつものメニューを口に運びながら寛(くつろ)いでいた宇津井健さんが突然、「大将！水谷豊君はいつ頃からこの店に来ているの？僕の方が古いよね？」と尋ねて来た。宇津井さんが他の芸能人を話題にするのは極めて珍しい事だった。訳を聞くと、TVドラマ撮影で初めて共演、二人共メキシコ料理が好みと解り、店が話題にのぼったらしい。その際、自分の方が先とお互い譲らなかつたと説明された。まるで子供の喧嘩のような話である。本当は水谷君が2年くらい先なのだが、「同じくらいでしょう」と答えると、そうかと頷き、満足そうな笑みを浮かべていた。店に愛着を感じている気持ちは殆どの常連客から伝わって来るが、この時ばかりは妙に嬉しく思ったのを覚えている。

後日、来店した水谷君からドラマの内容を聞かされた。難関の手術を我国で初めて成功させた心臓外科医の話は非常に興味深く、先駆者として未来への扉を開くその医者奮闘ぶりに、僭越ながら自分の思いを重

の敏腕さが、結果的に店の知名度も上げる相乗効果に至るとは、頑なにメキシコ料理の啓蒙に凝り固まっていたその頃には真似の出来ない才能の発揮ぶりだった。

フジTVの昼の看板「笑っていいとも」のトークコーナー。

ゲストに送られた電報を報告する部分でも、一番に電文とラ・カシータの名が読まれた。くじに当たったように捉えていたが、思い返すと誰かの思惑があったのかも知れない。おかげでタモリさんも来店するようになり、毎日のように芸能界の方々が訪れる日々が続くこととなるが、写真もサインも求めず、ただひたすらにメキシコ料理が持つ美味を提供し続けるスタンスに共感してくれた男が一人いた。「相棒」の杉下右京役でその名を全国に知られる彼、水谷豊君。まだ20代半ばでドラマの主演を勝ち取り、蘭さんとのデートを重ねていた頃だった。

あれから37年、現在も親交は続いているが、会計の折、屈託のない、あどけない笑顔で「なべちゃん、本当に美味しかった」と擦り寄ってくる人柄は変わらない。役者は大したものだと感心する。相棒で演じる役どころ右京の人間像、本質のキャラクターからは想像も出来ないのだから、彼との接点の中で幾つか書いてみたい話があるが、亡くなられた宇津井健さんとの出来事を次回の章で。



ね合わせていた。放映は正に劇的だった。胃の血管を切り、心臓の治療に使う発想は賛否両論で、非難を浴びながらも医療に果敢に挑戦してゆく姿や、肥大した心臓を切り取り、縮小して新たに形成するバチスタと呼ばれる手術を一度失敗しながらも、亡くなった患者の妻からの手紙に記された、「主人は希望を持ち、術後もすごく元気でした。それは事実です。どうか止めないで続けて下さい」との感謝の言葉で立ち直り、その後何十人も命を救ったのである。

心臓外科医の頂点を極め、神の手を持つと評される彼が、奥様とラ・カシータを訪れたのはその年の初秋の頃だった。「須磨です、水谷さんから美味しいメキシコ料理店だと聞いています。楽しみです」。普段は誰に対してもあまり緊張しないが、それを誘発させる距離感があった。前菜、タコス、一品と食事が進む中、二人に微笑みがこぼれたので、少し安堵し、「如何ですか？」と問いかけてみた。「全部、美味しいですね」と絶賛される言葉が関西訛りだった。「関西はどちらです

か？」と出身を聞くと、「神戸の岡本です」。驚いた、それは何と私が生まれ育った場所で、年齢も一つ下、しかも中学、高校のクラスメートは共通の遊び仲間。偶然どころの騒ぎでは無い。またたく間に距離は吹っ飛び、学生時代に買い物や食事をした店、屯（たむろ）していた喫茶店等の話題で盛り上がり、もう同窓会の様である。医者を目指した動機や奥様との馴れ初め、同級生との悪事の数々等プライベートな話は尽きる事無

第18章 徳島の古民家で田舎暮らし体験を創る

高木君が自分の遠縁にあたる男を連れて来たのは、代官山旧山手通りに店を構えて一年も経った頃だった。レコーディングスタジオのミキシング技師を目指して音響専門学校に通っているが、授業料が高くて飯も食えない、賄い付きでアルバイトとして雇って貰えないかとの申し出だった。丁度、人手が欲しかった時期でもあり快く承諾した。住居は偶然、店の隣にある賃貸住宅に空きがあり、現況は四畳半一間で風呂も無くトイレは共同だったが格安の家賃で入居出来た。好都合な事に当時の代官山の一角には店から歩いて五分の距離にある同潤会のアパートに銭湯があった。

何よりも遠い横浜から通っている私には休日や夜中に何かあっても対応出来る管理人が居てくれるような状況が生まれたのである。真面目な性格で、学業の傍ら毎日よく働き、よく食べ、よく笑い、ラ・カシータのメンバーに相応（ふさわしい）しい男だった。2年後、残念ながら大手レコード会社、各社の試験には合格しなかったが、高木事務所の女優達のマネージャーを務めるようになる。ずっとぼろアパートに住み続け、裏口から顔を覗かせては賄いの残りをせがんでいたのが記憶にある。魔性の女と評された女優に付いた頃は余りの我儘ぶりに閉口していたが、持前の明るさで泣き言も云わずただひたすらに自分の仕事をこなしていた。

20年も過ぎた頃だった。そんな彼に転機が訪れる。四国、徳島で農業を営んでいた父親を交通事故で失っ

第19章 メキシコ料理でジャガイモ大好きに

維新を機に明治10年頃我が国に開館された西洋料理の現場では、諸外国国賓を持って成す為にかレーやカツレツ、ピフテキ等が調理されていたが、まだまだ庶民には程遠い存在だった。

時は流れ、大正12年の関東大震災後、一軒の店で和、洋、中全ての日常料理が食べられる大衆食堂が出現したことで広く知られるようになる。そこで生まれたカレーライスやオムライス、ハヤシライスは絶大な支持を得て世間に定着してゆく。それからおよそ100年の食の歴史は、私達の食卓の風景を大きく変えた。カツカレーやカレーうどん、麻婆丼、最近では明太子スパゲッティに至るまで生活に馴染んでいる。

メキシコ料理がその領域に近づくのはまだ時間が掛かりそうだが、NHKの「今日の料理」で披露したように日本の食材との相性は抜群である。その美味しさを表現できる料理人が増え、提供される食事処が数多くあれば、前述のようにいつかはその時代が来ると信じている。

常々そんな事を思っていると朗報がやって来た。BS日テレからの電話があったのは2014年の春だった。オペラ歌手の森公美子さんが主導する大人の為の健康

く、時の経つのを忘れた夜だった。それからは地元の友人達を連れての来店が続き、最近では親しく「庸ちゃん！」と呼ばれる状況である。世界が認める実績と更に未知なる医療へ挑む彼とはとても比較にならないように、メキシコ料理の啓蒙に邁進する私を、知人達に称賛しているのを聞かされると有り難く誇りに思う。これからも人生の同士として付き合いたい。彼の名は須磨久善、我が良き友である。

てしまう。残された母親は途方に暮れていた。一万平方メートルもの広大な作地を仕切れる者が居ない現状を悩んでいたが、TV東京の番組制作等、業界では顔も売れ、乗りに乗っている状況はすぐに閉ざす訳にいかなかったのである。しばらくして連絡があり、話しを聞いて欲しいと相談を受けた。彼の発案は素晴らしかった。自分は故郷に戻り、都市住民が訪ねて来る癒しの村を設立するという企画である。つまり果樹オーナーを募集して、彼等と共に農業を継続させるアイデアだった。都会の喧騒を忘れ、田舎暮らしの体験による「ゆとり」や「やすらぎ」の場を提供し、さらに宿泊設備も完備する。脱帽である。是非やるべきだと賛成し、朝まで語り明かした。

確信を持ち実行に移してあれから10年余り、阿波の名産のスタヂ、みかん、柿、甘夏や桃、びわ、ざくろ等、様々な柑橘類に留まらず、筍、ミョウガ、タラの芽などの山菜類、四季折々の農作体験の希望者は引きも切らず、親の遺産を見事に開花させたのである。炭火の囲炉裏に吊るした鶏つくね鍋を囲む古民家の宿は、地元の情報誌に度々取り上げられ、県外からの一般客も多く訪れると報告があった。

先日、組合の用事で上京、メキシコ料理に舌鼓を打ちながら、いつの日かトルティージャも献立に加えて、創作料理の域を広げたいと冗談ぽく笑っていたが本心だろう。彼の名は原 幸喜、宿は蒼（あおい）と命名されている。

料理バラエティー「千客万来！森クミ食堂」への出演依頼である。送られてきた企画書には「もっと美味しく、もっと健康に！」をテーマに様々なアレンジ料理と記されていた。千載一遇の好機到来である。後日、来店したディレクターとの打ち合わせで、メキシカンを基盤にした創作料理の妙味と、感動の美味しさに出会える幾つかの献立を提案してみた。

身近に揃う食材で構成したアイデアに担当者は喜び勇み、「収録が大変楽しみです」と去っていった。当日の朝、店のスタッフ一人を伴い、三軒茶屋近くの小さなスタジオに向かった。初めてお会いした森さんは優しく朗らかで、現場の緊張感無くフランクな雰囲気は気持ちを楽にさせてくれた。

フレッシュなオクラを加えたサルサ・メヒカーナを焼き鮭に沿えたもの、同じサルサを豆腐や薄切りトーストに乗せた一品は絶賛だった。トークも弾み、リラックスモードで4週分の撮影は進んでゆく。アボガドディップを温野菜やマリボーチーズに絡める皿やカニ蒲とカイワレをワカモレで巻いた手巻き寿司に彼女は大喜び、「本当に美味しい！」のコメントに、プロデューサーがカメラの後ろから指で丸を作って私に示し

てくれた。

最後の週の冒頭、じゃが芋が登場すると森さんから爆弾発言、「私、じゃが芋大嫌い」。びっくりした。聞いてないし、進めるしか無い。トマトを主にしたランチソースで炒めた牛肉に加え、ポテトチップスに乗せる工程で、薄くスライスしたじゃが芋をラードで

第20章 メキシコサッカーチームも舌鼓を打つ

1964年開催の東京オリンピック。その舞台裏を記録した番組がBSで放映された。世界各国から来日する700人の選手達の食事を全て賄う料理人の奮闘ぶりが描かれていた。帝国ホテルの村上信夫氏の呼び掛けに応じて、全国から集まった300人の調理担当者それぞれに惜しげもなくホテルのレシピを渡し、一年半かけて教育実習を行うのである。

重要な映像が残されていた。メキシコに関しては未知の領域のため、ムッシュ村上本人が大使館まで出向いて教えを請うのだが、「CHILE CON CARNE」を要望しているのである。思うに英語の料理書を参考にされたのだろう。しかし大使館の賄い婦が調理している映像を見ると、ラードと塩で煮豆(フリホーレス・デ・オージャ)を作り、牛挽肉を加えていた。相手の立場を考慮して講習したと推測されるが果たして選手村の現場ではどうだったのであろうか？

当時、私はまだ高校生、時を遡ることが許されるなら、是非、お手伝いをしたいと画面を追いながら感じていた。唯、村上氏の実行力には心底敬服する。町場とホテルのコックが共に仕事をするなど考えられない時代である。やはり料理への追及が熱意を促し、タブーとされる状況を覆して行くのだろう。メキシコ料理の道筋は課題は多いが、表現者が増えることで前後に光明は見出せるはず、近年、中南米に興味を持つ若者達が店を訪ねてくるので少しは期待できるかも。

福井の海岸ホテルの料理長とセコンドがある日、メキシコ料理のレクチャーをお願いしたいと訪ねて来た

揚げていた時だった。聞こえて来た声は、「何ていい匂い、私、この時点でじゃが芋好きになりそう」。油切りに置いた瞬間、手が伸びて来た、摘まみ食いである。美味しさに気付いたこの料理はお代わりまでしてくれた。嬉しかった！10時間に及んだ収録に疲れてはいたが、充足と達成感に心地が良かった。

のは2002年の2月頃だった。サッカーの世界カップで合宿予定のメキシコチームに提供する食事が皆目見当がつかなくて、大使館に相談したらラ・カシータを紹介されたとの説明だった。丁度、専門書を刊行したばかりだったので、基本のサルサを使った幾つかの皿を食べながら、レシピとポイントを読んでもらった。

青唐辛子や鷹の爪でも出来なくは無いが、本国の食材を扱う業者から購入するのが最適、そしてスパイスに頼らず、塩と風味を持つ乾燥唐辛子の旨味や香りが海鮮や肉、野菜を成就させる話に聞き入り、熱心にメモを取っていた。気に入ったのは燻煙唐辛子を使ったサルサ・チポトレ、トマトが主の単純明快なサルサ・ランチェラ、鋭い辛さのサルサ・ロハで、どれも全部美味しいとの評価を頂けた。調理人だけに呑み込みは良かったが、トルティーヤに関しては練習が必要で、出来なければパンやメキシカンライスで補うよう勧めてみた。

ハンバーグやステーキ、煮込みなどへの応用を提案したら、大変な喜びようで、二人から固い握手でお礼され、使命を果たした充足感に満たされた夜だった。

後日談になるが、先ごろ八百長疑惑で解任されたアギーレ氏は当時のチームの監督で全日本の重責を引き受けた理由の一つに、往時の合宿時のホテルの料理が美味しかったからとのコメントがあったとサッカー関係者から聞かされた。辞書を読破し、実践してくれたあの時の二人に感謝である。(連載5完)

お知らせ

メキシコ・日本アミーゴ会 設立20周年記念昼食会 (案)

日時：2019年9月21日(土) 11:00 受付開始
11:30 開会～(13:00 Fiesta Mexicana 開会式)
会場：ホテルグランドニッコー東京 台場
会費：5,000円(当日受付で徴収)
*詳細は後日メルマガで会員にご案内-お楽しみに!!
*Fiesta Mexicana2019in お台場も20周年!!
会期：2019年9月21日(土)～23日(月・祝日)

私の本棚

『メキシコにおける聖フェリーペ・デ・ヘスス 崇拝の変遷史 神の沈黙をこえて』

川田玲子著 2019年3月 明石書店 9,504円(税込)
アミーゴ会主催 2014年メキシコ歴史文化講演会第4回講師の著作です。メキシコ生まれのスペイン人で1597年に長崎で磔刑に処せられたキリシタン二十六聖人の一人フェリーペ・デ・ヘスス。生地メキシコでは死後30年を経て聖人として崇拝されている。この聖フェリーペ崇拝の成り立ちと意義、変遷を史料を基に丹念に描いた力作(商品解説の摘記)。600頁に及ぶ大冊ですが梅雨の読書にお勧めです。

お知らせ

ラファエル・ゲーラのピアノソロ +黒沼ユリ子 サマージョイントコンサート

日時：2019年7月6日(土) 14:00～
会場：ラビドールホール (御宿町御宿台132)
定員：120人/全席自由席 @4,000円
申込：080-1052-7096(黒沼俊子さん)
e-mail: casa.violin.930@gmail.com
主催：黒沼ユリ子のヴァイオリンの家
日本メキシコ友好の家
[次回予告]
バイオリンの家3周年 弦楽三重奏・四重奏の会
9月29日(日)午後2時 於ラビドールホール

あとがき：メルバ・ブリア Melba Pría 駐日メキシコ大使が6月初めに着任されました。歓迎申し上げます。ブリア新大使はインドネシアとインドの駐在大使を歴任された、先住民言語と文化の専門家とのことです。ロベスオブラドール大統領率いる新しいメキシコを代表する女性大使でもあります。また毎年好評のメキシコ歴史文化講演会は、今年2019年が国連の国際先住民言語年であることも踏まえて、殖民地時代に「先住民が西欧文化と出会い、どの様に伝統文化と融合を進めながら、一方では自己主張を残してきたか」をメインテーマに事業案を策定中です。ご期待ください。G20大阪サミットにメキシコ大統領不参加で外相が出席。[20190628か]